

# 未来への伝承

## 常陸の玉作りとメノウ産地

土浦市指定文化財である「烏山遺跡・八幡脇遺跡出土玉作資料」は、勾玉や管玉などの玉類製作における未成品や破片、砥石などの工具、ともに出土した土器などからなり、古墳時代の玉類の製作工程がわかる重要な資料です。特に八幡脇遺跡から見つかった古墳時代前期中葉～後葉の玉作工房跡は、メノウ製勾玉の工房跡としては日本最古です。

弥生・古墳時代の玉作りは、日本海側の山陰や北陸を中心に行われてきました。古墳時代には、大和政権の影響下で、関東をはじめとした東日本においても玉作りが開始されました。古墳に副葬される初期の玉類は、翡翠や碧玉などの緑色系が多く見られますが、前期中葉以降になるとメノウや水晶、琥珀の勾玉など、赤色系の玉も見られ、素材が多様化しました。

常陸の玉作りの特徴は、メノウ製勾玉の製作にあります。勾玉の素材となるメノウは、石英の一種で、緻密な石英に酸化鉄などの微粒子が混ざったものです。半透明で、白色から赤色の縞模様を特徴とし、比較的硬く傷がつきにくいうえ、割れにくい性質があり、実験用の乳鉢や火打石などさまざまなものに用いられています。主な産地は茨城県久慈川・玉川流域や島根県、石川県などで、常陸の玉作りにおいては、扁平で小ぶりの河原の転石を利用していたと考えられています。

玉川は、常陸大宮市から那珂市との境界を流

れ久慈川に合流する一級河川です。玉川流域は土浦から直線距離で約60キロメートルあります。「常陸国風土記」久慈郡の条には次のように書かれています。

「北に小水有り。丹石交れり。猶、色は琥珀に似れり。炎を鑽るに尤好くして、玉川と号く。」

玉川で見られるメノウについて書かれた部分で、色は琥珀のようで、火打石に適していると書かれています。古くから、メノウの石が重要視され玉の素材とされてきたことから、「玉川」と呼ばれていたようです。近くには、金砂郷玉造(中平)遺跡(常陸太田市)があり、土浦のメノウ製勾玉製作に後続する古墳時代中期以降の玉作遺跡の可能性があり、今後の調査が期待されています。

秋の企画展では「常陸の玉作り 重要文化財武者塚古墳出土品同時公開」を開催中です。記念講演会やギャラリートーク、武者塚古墳石室公開など多くのイベントがあります。ぜひご覧ください。

岡上高津貝塚ふるさと歴史の広場  
(☎826・7111)



▲玉川(常陸大宮市矢口橋付近)



▲玉川採集メノウ原石